

地域看護実習指導者が必要とする保健師基礎教育のあり方

小田美紀子・齋藤 茂子・小川 智子*・永江 尚美**

概 要

本研究は、第一線で活動している保健師の学生の実習をとおした意見をもとに、保健師基礎教育の今後の課題を明らかにすることを目的とした。S県にて就業中の行政保健師を対象とし、実習指導において気づいた点についてアンケート調査を行った。その結果、学生は日頃からの対人関係づくり、目的・問題意識、社会情勢への関心、生活力や積極性の習得、講義内容の再学習、教員は、実習ラウンド時の指導内容強化、現場学習、指導者は、学生実習の業務への位置づけ、実習指導手引きの作成、学生指導からの学びが課題であった。教育体制については、1年以上の保健師教育の必要性、実習内容の充実、実習指導に関する研修の開催が今後の課題であることが明らかになった。

キーワード：保健師基礎教育、地域看護学実習、実習指導者

I. はじめに

近年、激動する社会情勢の中で保健師が対応する健康課題は、高度化、複雑化、多様化しており、直接的な保健サービスを中心とした対人支援能力、施策化を含む地域支援や管理能力という幅広い能力とそれぞれに対し高度な知識、技術を伴った実践能力が求められている。このような状況に対応できる人材育成として、質の高い保健師教育が求められる。

S県における保健師教育は、保健師養成の公立学校として全国に先駆け、昭和15年に始まり、社会・地域の状況に応じ、先駆的な教育活動の取り組みを展開し、全国からも注目されていた(木村, 1997)。

本学は、長年S県の保健師教育を担ってきた公立学校が閉校した後、1998年に保健師教育の1年課程である専攻科を開設し、フィールドで地域看護の基礎づくりを行い、それを土台にして行政機関で保健福祉活動を学ぶという、内容を充実させた保健師基礎教育に取り組んでいる。

*島根大学大学院教育学研究科

**島根県健康福祉部健康推進課

現在、2009年のカリキュラム改正に向けて、より充実した教育内容を検討中である。また、本学は、4年制大学化構想があり、保健師教育のあり方そのものを考えていく重要な時期にある。

全国的には、1993年から看護系大学が各地で次々と開設され、それに伴い保健師教育の多くを大学教育が担うようになった。S県においても1999年から看護師と保健師を統合したカリキュラムを実施する4年制大学が開設された。これにより、保健師教育の実習機関である保健所・市町村は、教育内容の異なる2つの大学の実習を受け入れる状況になった。

そこで、本研究は、第一線で活動している保健師の学生の实習をとおした意見をもとに、保健師基礎教育の今後の課題を明らかにした。

II. 研究方法

1. 地域看護学実習の概要

本学では、1年課程の前期に地域看護基礎実習を、後期に地域看護実習を実施している。保健師基礎教育の1年間のプロセスを図1に示した。

地域看護基礎実習では「地域住民の生活の場

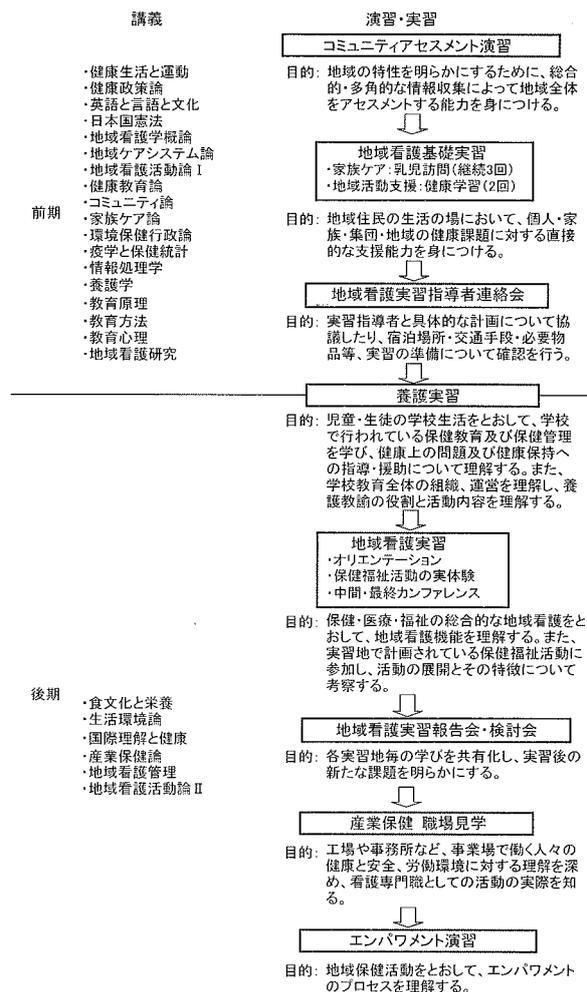


図1 保健師基礎教育の1年間のプロセス

において、個人・家族・集団・地域の健康課題に対する直接的な支援能力を身につける。」を目的としている。実習内容は、本学周辺の地区をフィールドとし、地域看護基礎実習前に行った、受け持ち地区の地域看護診断により明らかになった健康課題に対して、地域活動支援として健康学習を行っている。地域活動支援では、企画・実施・評価の一連の流れも経験し学んでいる。また、乳児のいる家庭に継続訪問を行っている。

後期の地域看護実習では「保健・医療・福祉の総合的な地域看護をとおとして、地域看護機能を理解する。また、実習地で計画されている保健福祉活動に参加し、活動の展開とその特徴について考察する。」を目的としている。また、3つの大目標とその目標それぞれに5つの小目標を設定している(表1)。実習に向けて、実習開始3ヶ月前には、実習連絡会を開催し、教

表1 地域看護実習の目標

- (1) 実習市町村の特性を把握し、保健医療福祉の現状と課題を認識する。**
 - ① 実習市町村の地域特性が説明できる。
 - ② 実習市町村の行政組織と財政基盤について理解する。
 - ③ 実習地域の保健医療福祉計画の概要を理解する。
 - ④ 実習地域の健康課題について説明できる。
 - ⑤ 実習市町村の保健医療福祉に関連する社会資源を列挙できる。
- (2) 住民、行政および専門職の協働による保健福祉活動について理解する。**
 - ① 地域で展開される保健医療福祉活動の根拠や意義を述べるができる。
 - ② 住民や当事者の主体的な活動を支援する関係者および関係機関の連携について考察する。
 - ③ コミュニティづくり・まちづくりのための具体的な活動を列挙できる。
 - ④ 地域の人々の生涯をとおした健康づくり活動の事例が述べられる。
 - ⑤ 健康課題を取り上げて、個人、家族、集団および地域の力量を引き出すケアシステム化について考察する。
- (3) 健康課題に対する多様な地域看護活動をとおして保健師の専門性を認識する。**
 - ① 健康課題を取り上げて、地域のニーズ把握から施策化、健康政策づくりまでの過程を理解する。
 - ② ケアマネジメントやケアコーディネーションの場面をとおして、その基本を身につける。
 - ③ 多様化するニーズと保健師に必要なとされる機能について考察する。
 - ④ 保健福祉活動をとおして、生活者の人権を尊重した倫理的態度を身につける。
 - ⑤ 日常業務における保健師の力量形成について考察する。

員が実習概要を説明し、協力依頼をしている。また、学生と実習指導者による打ち合わせも実施し、学生の実習テーマの確認や実習指導者から事前学習に必要な資料をもとに実習地の特徴ある活動等について説明を受けている。

実習事前学習は、実習地の地域特性と概要について、実習指導者から提供があった既存資料をもとに担当教員の助言を得ながらまとめている。実習期間中も継続して情報収集や考察を行い、実習市町村の理解を深めている。また、学生は実習において深めたいテーマとして健康課題を1題取り上げ、実習計画に反映するようにしている。

実習内容は、オリエンテーションを受けて、実習市町村および保健所の組織・財政基盤、保健福祉行政の概要等を学び、保健福祉活動は実体験することにより学んでいる。3週間の実習期間の中で中間・最終に保健所圏域単位で学生

主体のカンファレンスを実施し、学びを深めている。実習終了後には本学において実習指導者の参加を仰ぎ、学生の企画による報告会を実施している。学生は、保健所圏域グループで実習の学びをまとめ、新たな学習課題を明らかにしている。

教員の実習への関わりは、保健所圏域単位で受け持ち担当教員を決め、実習前から実習機関との連絡調整や学生の事前学習への指導を行っている。実習期間中は、実習機関をラウンドし、実習内容の調整や、学生への直接指導、一緒に事業参加するなど必要に応じた指導を行っている。

2. 対象と方法

2006年9月から10月に、S県にて就業中の行政機関の保健師330名を対象とし、①学生の実習に対する目的意識、②実習レディネス、③実習の内容や到達目標、④実習態度、⑤保健師実務に関する学習、⑥学生の問題意識、⑦住民との関係づくり等、実習指導において気づいた点について、質問紙による無記名、自記式アンケート調査を行った。

3. 分析方法

各問いに対して記述された内容を意味内容が変化しないように要約し、意味内容の類似性に従い、サブカテゴリー、カテゴリーに分類し、抽象度を高めた。カテゴリー名は内容を理解出来るように表現した。

また、抽出されたカテゴリーを質問項目毎に保健所・市町村共通、保健所、市町村別のカテゴリーに分類した。さらに、学生、教員、指導者自身、教育体制別に分類した。

信頼性、妥当性を高めるために、4名の研究者で合議の上、検討を行った。

III. 倫理的配慮

県庁の所管課に調査の概要を説明して協力を仰ぎ、職場別対象者数は県庁の所管課から情報を得た。調査票は職場ごとに配布し、個人には依頼文により調査の同意を得た。対象者個人のプライバシー保護及び調査への参加の任意性を保証するため、回収は個人で直接大学に郵送することにした。

なお、本研究は島根県立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

IV. 結 果

1. 対象者の属性 (表2)

有効回収数は99名 (30.0%) であった。回答した保健師の年齢は40才代が最も多く34名 (34.4%)、次いで50才代が22名 (22.2%)、20才代と30才代が20名 (20.2%) であった。平均年齢と標準偏差は、40.3±12.8歳であった。

就業場所は、延べ人数で見ると、市町村の健康増進等の担当が最も多く63名 (63.6%)、次いで保健所の健康増進担当が11名 (11.1%)、保健所の結核・難病担当が10名 (10.1%) の順であった。

保健師が修了した教育課程は、専門・専修学校の1年課程が最も多く78名 (78.8%)、次いで看護系大学が12名 (12.1%)、短期大学1年課程が6名 (6.1%) の順であった。

就業年数は、21年から25年が最も多く28名 (28.3%)、次いで26年以上が24名 (24.2%)、6年から10年が16名 (16.2%) の順であった。

表2 対象者の基本属性

		人数(人)	割合(%)
年齢	20代	20	20.2
	30代	20	20.2
	40代	34	34.4
	50代	22	22.2
	未回答	3	3.0
	就業場所	保健所	28人
	精神保健	9	9.1
	結核・難病	10	10.1
	健康増進	11	11.1
	不明	1	1.0
	市町村	71人	
	健康増進等	63	63.6
	介護保険関係	6	6.1
	職員の健康管理	0	0.0
	障害・福祉関係	2	2.0
	その他	3	3.0
	不明	2	2.0
教育課程	専門・専修学校の1年課程	78	78.8
	4年制の専門・専修学校	2	2.0
	短期大学1年課程	6	6.1
	看護系大学	12	12.1
	看護系大学院	1	1.0
就業年数	新卒	2	2.0
	満1年～5年	14	14.1
	満6年～10年	16	16.2
	満11年～15年	9	9.1
	満16年～20年	6	6.1
	満21年～25年	28	28.3
	満26年以上	24	24.2

注：就業場所の業務別は複数回答にて延べ人数を記載

2. 実習指導者の保健師基礎教育に対する意見

1) 学生の実習に対する目的意識については、49の記述の内容から29サブカテゴリーが抽出され、14のカテゴリーを抽出した(表3)。以下、カテゴリーは「」で示す。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「目的意識の有無」、「目的意識が不明確」、「目的意識の学生差」、「将来像の明確さ」、「4年制と専攻科の目的意識の差」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「不十分な事前学習」であった。実習指導者に対して抽出されたカテゴリーは、市町村保健師から抽出された「認識不十分な教育目的・内容」であった。教育体制に対して抽出されたカテゴリーは市町村保健師から抽出された「教育機関による指導の差」であった。社会情勢に関しても市町村保健師から「少ない保健師採用の影響」が抽出された。

表3 学生の実習に対する目的意識

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・目的意識の有無	・目的意識あり ・目的意識なし
	・目的意識が不明確	・漠然とした目的意識 ・細かい目的意識
	・目的意識の学生差	・学生による目的意識の差
	・将来像の明確さ	・将来像の明確さ ・興味あるなしの強弱
	・4年制と専攻科の目的意識の差	・4年制と専攻科の目的意識の差 ・目的意識の無い4年制学生 ・目的意識を持った専攻科学生
市町村保健師	・目的意識の有無	・目的意識あり ・目的意識なし
	・目的意識が不明確	・不明瞭な目的意識 ・漠然とした目的・目標 ・狭い目的意識 ・教科書的な目的
	・目的意識の学生差	・学生による目的意識の差 ・目的意識がある学生の積極的な実習態度 ・目的意識がある学生の高い満足度 ・出身地による目的意識の差
	・将来像の明確さ	・保健師志望と看護師志望による目的意識の差
	・4年制と専攻科の目的意識の差	・4年制と専攻科の目的意識の差 ・目的意識の無い4年制学生 ・目的意識を持った専攻科学生
	・不十分な事前学習	・不十分な業務への理解
	・教育機関による指導の差	・教育機関による指導の差
	・認識不十分な教育目的・内容	・カリキュラムについて認識不十分 ・教育目的が抽象的
	・少ない保健師採用の影響	・少ない保健師採用の影響

2) 実習レディネスについては、61の記述の内容から34のサブカテゴリーが抽出され、10のカテゴリーを抽出した(表4)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「十分なレディネ

ス」、「不十分なレディネス」、「必要な準備内容」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「実習レディネスの学生差」、「4年制と専攻科のレディネスの差」であった。実習指導者に対して抽出されたカテゴリーは、保健所保健師から抽出された「指導者による事前学習の把握」であった。教育体制に対して抽出されたカテゴリーは、市町村保健師から抽出された「講義と実習期間のズレ」であった。

表4 実習レディネス

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・十分なレディネス	・資料作成 ・ITによる情報収集
	・不十分なレディネス	・少ない自己学習 ・準備不足
	・必要な準備内容	・前年度実習の活用 ・具体的な事前準備 ・法的根拠 ・地区把握 ・現場体験 ・事業の全体像 ・アプローチ方法 ・現場活動の流れ ・保健師の全体像
	・指導者による事前学習の把握	・指導者による事前学習の把握
	・十分なレディネス	・的確な準備 ・既存資料による学び ・ITによる情報収集 ・地区把握
市町村保健師	・不十分なレディネス	・少ない自己学習 ・受け身の態度
	・必要な準備内容	・実習目的の明確化 ・実習テーマの明確化 ・学習方法 ・予算 ・法的根拠 ・地域をみる ・想像の幅 ・応用力 ・保健事業の概要 ・イメージできる保健活動
	・実習レディネスの学生差	・実習レディネスの学生差
	・4年制と専攻科のレディネスの差	・カリキュラムや指導体制の影響 ・4年制は事前準備や学習が不足している
	・講義と実習期間のズレ	・講義と実習期間のズレ

3) 実習の内容や到達目標については、55の記述の内容から31のサブカテゴリーが抽出され、15のカテゴリーを抽出した(表5)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「不的確な目標設定」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「目標設定の難しさ」、「テーマ設定」、市町村保健師のみに抽出されたのは、「的確な目標設定」、「指導者と学生の目的達成度の相違」、「学生による実習内容の差」であった。実習指導者に対しては、保健所保健師と市町村保健師

共通なものは、「評価の難しさ」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「学生指導体制の整備」、市町村保健師のみに抽出されたのは、「実習地による実習内容の差」であった。教育体制に対しては、市町村保健師から抽出された「実習内容の検討」、「教育機関・教員による相違」、「教育機関の支援体制の強化」であった。

表5 実習の内容や到達目標

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・目標設定の難しさ	・目標が設定しにくい実習内容 ・会議中心 ・見学中心
	・不的確な目標設定	・高すぎる目標設定 ・教育機関と地域のギャップ
	・学生指導体制の整備	・学生実習の具体的な体型 ・保健所と市町村の連携 ・行政の仕組みの理解 ・現場体験
	・評価の難しさ	・主観のみによる評価
	・テーマの設定	・個人テーマの必要性 ・個人とグループ共通テーマの必要性 ・広い視野がもてるテーマ
	・実習期間の影響	・短い実習期間 ・実習期間の適切な事業
	・的確な目標設定	・的確な目標設定 ・現実可能な目標設定
	・不的確な目標設定	・不的確な目標設定 ・高すぎる目標設定 ・短期目標と長期目標の必要性 ・理想主義
	・指導者と学生の目標到達度の相違	・指導者と学生の目標到達度の相違
	・実習内容の検討	・見学中心 ・少ない訪問
市町村保健師	・評価の難しさ	・評価方法の検討 ・指導者としての不安
	・学生による実習内容の差	・学生による差
	・教育機関・教員による相違	・教育機関・教員による指導内容・方針の相違 ・目標が高い専攻科
	・教育機関の支援体制の強化	・現場に任せすぎる実習
	・実習地による実習内容の差	・実習地による実習内容の差

4) 実習態度については、63の記述の内容から30のサブカテゴリーが抽出され、12のカテゴリーを抽出した(表6)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「良好な実習態度」、「基本的生活習慣の欠如」、「積極性の欠如」、「将来像の明確さ」、「学生による実習態度の差」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「基本的生活習慣が身についている」、「4年制と専攻科の実習態度の差」であった。

表6 実習態度

	カテゴリー	サブカテゴリー	
保健所保健師	・良好な実習態度	・熱心・良好 ・意欲 ・丁寧な記録 ・基本的習慣の習得	
	・基本的生活習慣の欠如	・できない挨拶 ・生活力の乏しさ	
	・積極性の欠如	・積極性の欠如 ・薄い反応 ・受け身的な態度 ・興味の有無	
	・将来像の明確さ	・保健師志望と看護師志望の相違	
	・学生による実習態度の差	・学生による実習態度の差 ・グループ差	
	市町村保健師	・良好な実習態度	・熱心・良好 ・積極的な態度 ・上手な記録
		・基本的生活習慣が身についている	・あいさつ ・礼儀 ・サービス態度
		・基本的生活習慣の欠如	・あいさつ ・服装の乱れ ・乏しいコミュニケーション能力 ・生活力の乏しさ
		・積極性の欠如	・積極性の欠如 ・しりごみ
		・将来像の明確さ	・保健師志望と看護師志望の相違
・学生による実習態度の差		・学生による実習態度の差 ・専攻科学生の良い態度 ・4年制学生の消極的な態度 ・怠惰な態度の4年制学生	

5) 保健師の業務に関する学習については、59の記述の内容から33のサブカテゴリーが抽出され、22のカテゴリーを抽出した(表7)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「不十分な実務理解」、「学生による実務学習の差」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「将来像の明確さ」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「実務学習への積極性」、「マニュアル人間」、「コミュニケーション能力の向上」、「事前学習の必要性」、「実務・演習の重視」、「4年制と専攻科の業務に関する学習の差」であった。実習指導者に対しては、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「実習受け入れ体制の整備」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「学ぶ場の減少」、「保健師の力量形成」であった。教育体制に対しては、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「実習期間の影響」、「教育機関と実習機関の連携」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「教育内容の充実」、教員に対して、「教員の力量形成」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「実習内容の見直し」であった。

表7 保健師業務に関する学習

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・不十分な実務理解	・難しい保健所保健師業務の理解
	・学生による実務学習の差	・学生による実務学習の差
	・将来像の明確さ	・保健師志望の学生は積極的な学習
	・学ぶ場の減少	・デスクワーク中心の実務
	・実習受け入れ態勢の整備	・保健事業の減少
		・健康学習が実施できる体制づくり
		・経験・体験の重視
		・実務前後の指導
		・特色ある事業を学ぶ機会
		・短い実習期間
市町村保健師	・教育内容の充実	・演習の重要性
	・教員の力量形成	・教員の現場学習の必要性
	・保健師の力量形成	・学生指導からの学び
	・教育機関と実習機関の連携	・不十分な教育内容の把握
	・不十分な実務理解	・難しい保健師業務の理解
		・理解しにくい他機関との連携
	・実務学習への積極性	・事業による積極性の違い
	・マニュアル人間	・マニュアルどおりの学生
	・学生による実務学習の差	・学生による実務学習の差
	・コミュニケーション能力の向上	・日頃からの対人関係づくりの必要性
市町村保健師	・事前学習の必要性	・イメージできる保健師業務
		・市町保健師と保健所保健師の理解
		・行政事務の理解
	・実習受け入れ態勢の整備	・業務多忙による困難な指導体制づくり
		・合併による影響
	・実習期間の影響	・短い実習期間
	・実務・演習の重視	・実務重視
		・演習の増加
	・実習内容の見直し	・見学中心の実習
		・目的と実施の乖離
市町村保健師	・1年制と専攻科の業務に関する学習の差	・4年制と専攻科の目的意識の差
	・教育機関と実習機関の連携	・不十分な教育内容の把握

6) 学生の問題意識については、38の記述の内容から23のサブカテゴリーが抽出され、16のカテゴリーを抽出した(表8)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「問題意識の有無」、「問題意識の学生差」、「将来像の明確さ」、「専攻科と4年制の問題意識の差」であり、保健所保健師のみに抽出されたカテゴリーは、「意識しすぎる市町村と保健所保健師の相違」であり、市町村保健師のみに抽出されたカテゴリーは、「積極性が必要」、「社会情勢の把握の必要性」、「マニュアル人間」であった。実習指導者に対しては、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「指導の工夫」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「保健師の力量形成」であった。教育体制に対しては、市町村保健師のみに「フィールド実習の必要性」が抽出された。

7) 住民との関係づくりについては、57の記述の内容から23のサブカテゴリーが抽出され、11のカテゴリーを抽出した(表9)。学生に対して抽出されたカテゴリーのうち、保健所保健

表8 学生の問題意識

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・問題意識の有無	・問題意識あり
		・問題意識なし・低い
	・意識しすぎる市町村と保健所保健師の相違	・意識しすぎる市町村と保健所保健師の相違
	・問題意識の学生差	・学生による問題意識の差
	・将来像の明確さ	・問題意識を持った保健師志望の学生
市町村保健師	・指導の工夫	・指導の工夫
	・専攻科と4年制の問題意識の差	・問題意識が薄い4年制学生
	・問題意識の有無	・問題意識あり
		・問題意識なし
		・問題意識が低い
市町村保健師	・積極性が必要	・受け身の態度
		・積極的質問の欠如
	・社会情勢の把握の必要性	・知らない現実
		・トピックスに対する高い意識
	・マニュアル人間	・マニュアル人間
	・問題意識の学生差	・学生による問題意識の差
	・将来像の明確さ	・保健師志望でない学生の問題意識の薄さ
		・4年制は保健師志望意識が低い
	・指導の工夫	・指導の工夫
	・専攻科と4年制の問題意識の差	・指導内容の影響
市町村保健師	・保健師の力量形成	・異なる目的・問題意識
	・フィールド実習の必要性	・学生指導からの学び
		・フィールド実習の必要性

師と市町村保健師共通なものは、「コミュニケーション能力の向上」、「関係づくりの学生差」であり、市町村保健師のみに抽出されたのは、「良好な関係づくり」、「基本的生活習慣が身についている」、「基本的生活習慣の欠如」であった。実習指導者に対しては、保健所保健師と市町村保健師共通なものは、「住民と関わる機会の減少」であり、保健所保健師のみに抽出されたのは、「指導体制の整備」であった。その他、市町村保健師から「学生と接する住民の積極性」

表9 住民との関係づくり

	カテゴリー	サブカテゴリー
保健所保健師	・コミュニケーション能力の向上	・コミュニケーション能力不足
		・積極性の欠如
		・住民との適切な距離
		・振り返り姿勢の大切さ
	・関係づくりの学生差	・学生による住民との関係づくりの差
市町村保健師	・指導体制の整備	・住民とふれあう場の設定
		・グループ、組織育成への参加
	・住民と関わる機会の減少	・住民と関わる機会の減少
	・良好な関係づくり	・積極的な関係づくり
		・努力する姿勢
市町村保健師	・基本的な生活習慣が身についている	・上手なコミュニケーション
		・対象に見合った関わり
		・あいさつ
		・笑顔、明るい表情
		・丁寧な対応
市町村保健師	・基本的な生活習慣の欠如	・不適切な言葉づかい
		・適切な態度
	・コミュニケーション能力の向上	・積極性の欠如
		・下手なコミュニケーション
		・強い緊張感
市町村保健師	・関係づくりの学生差	・学生による住民との関係づくりの差
	・住民と関わる機会の減少	・住民と関わる機会の減少
	・学生と接する住民の積極性	・学生の受け入れ良好な住民

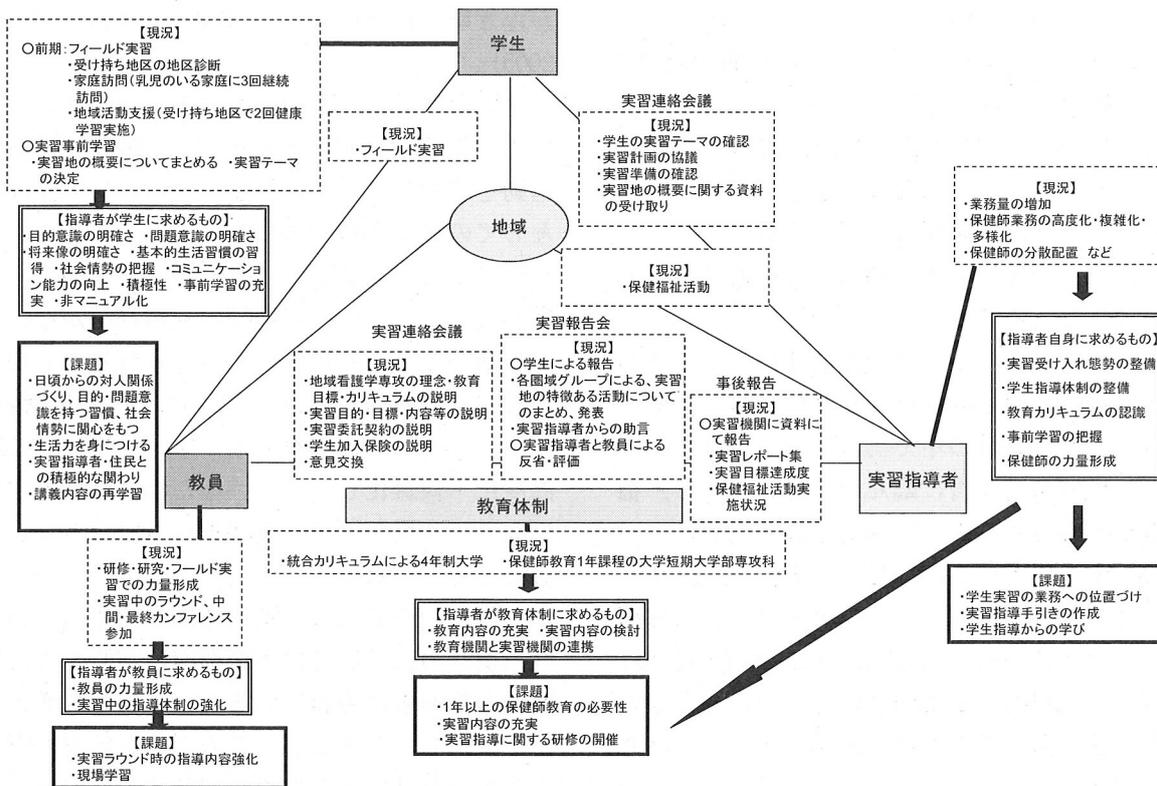


図2 地域看護実習指導者が必要とする保健師基礎教育のあり方

について抽出された。

V. 考 察

指導者が、学生、教員、指導者自身、教育体制に求めるものについて明らかにし、それぞれの求めるものに対し、現在行っていることを現況として示し、現況を踏まえた上で、今後の課題を明らかにした。これらを図2にまとめた。

1. 指導者が学生に求めるもの

学生に関するカテゴリーは、以下に示すとおり、「目的意識が不明確」、「将来像の明確さ」、「4年制と専攻科の目的意識の差」、「不十分な事前学習」、「必要な準備内容」、「目標設定の難しさ」、「テーマ設定」、「基本的生活習慣の欠如」、「積極性の欠如」、「不十分な実務理解」、「マニュアル人間」、「コミュニケーション能力の向上」、「事前学習の必要性」、「問題意識の有無」、「社会情勢の把握の必要性」、「良好な関係づくり」等40のカテゴリーであった。

これらから、指導者が学生に求めるものとして、1)目的意識の明確さ、2)問題意識の明確さ、3)将来像の明確さ、4)基本的生活習慣の

習得、5)社会情勢の把握、6)コミュニケーション能力の向上、7)積極性、8)非マニュアル化、9)事前学習の充実の9項目があげられる。

「4年制と専攻科の差」については、各質問項目の記述内容をみると、専攻科は保健師志望者が多いことや、4年制は将来、看護師か保健師か迷っている学生が多いことが影響しているという記述があるため、ここでは「将来像の明確さ」に含めて考えることとした。また、「テーマ設定」については、本学は個人で実習前に考え、テーマが実習を通して学ぶ上で可能なテーマか、保健師の学習として適切なテーマであるかについて、実習前の連絡会議で実習指導者に確認をしている。よって、実習テーマの明確化は、本学は十分に行えていると考え削除した。

清水は、4年制大学の保健師教育の現状をまとめた中で、臨地実習の場で指導者が学生に対して受ける印象として、1)生活体験が少ない、2)保健師を目指さない学生には実習意欲が見られない、3)院内実践が少ないため、臨地実習の場面でも積極性がなく引いてしまう、4)看護職に就くことが目的ではなくライセンスを取るための実習、5)理論づけはできるが応用

としての実践はできない、という意見をまとめている（清水，2006）。これらは、本研究の結果とほぼ一致している。本学は1年間の保健師教育課程であるため、清水が示している上記2）、3）、4）については低い傾向にあると考えられる。しかし、本学においても近年の学生の傾向として、意欲や積極性の低下を感じることもあるため、今後の学生の課題として対策を考える必要性はある。

現況として、本学の学生は前期にフィールド実習を行い、保健師に必要な基礎知識・技術・思考・態度を地域の中で実践を通して身につけた上で地域看護実習に臨んでいる。よって、指導者が求めるものの9) 事前学習の充実については、すでに実施しているが、実習レディネスの「必要な準備内容」のサブカテゴリーに抽出されていた、行政の仕組み、保健事業の概要、予算、法的根拠、事業の全体像について、講義内容を実習前に学生各自で再学習することは必要と考えられる。

実習指導者が求めるものの1) から8) に対しては、日頃からの学生の意識改革が必要と考える。具体的には、日頃からの対人関係づくり、目的・問題意識を持つ習慣、社会情勢に関心をもつこと、生活力を身につけること、何事にも積極的にとりかかると、実習に関しては、実習指導者・住民との積極的な関わりを意識して行うことが必要と考えられる。

2. 指導者が教員に求めるもの

「教員の力量形成」、 「教育機関の支援体制の強化」という教員に関する2つのカテゴリーから、指導者が教員に求めるものとして、1) 教員の力量形成、2) 実習中の指導体制の強化の2項目があげられる。

現況として、教員の力量形成のために各自が行っていることは、保健師活動や保健師教育に関する研修受講、専門性を高めるための研究、学生とフィールド実習を行い、教員自身の学びも深めている。実習中の指導体制については、受け持ち実習地のラウンド、中間・最終カンファレンスの参加である。実習中の教員指導体制については、保健師学生の実習指導に関するあり方調査研究事業報告書においても「多くの大学では少人数の教員が各施設を巡回指導し、実習

指導の実質を施設側の指導者に委ねている現状が浮き彫りになった。」と報告している（平澤，2005）。

全国保健師長会が行った中国・四国ブロックにおける意見交換会の中では、「保健所等地域活動を理解していない教員が多いので、保健師としての経験を持つ人に教員になって欲しい。」という意見があがっていた（大場，2007）。4年制大学化に伴い、保健師の現場経験がない教員が増加している可能性が考えられるが、現場経験がある教員においても、激動する社会情勢や社会ニーズの多様化に伴い、保健師活動は、高度化・複雑化してきているため、常に現場に出向き、現場から学ぶ姿勢を持ち続けることが必要と考えられる。

実習中の教員による指導体制の強化については、現状の教員数では実習指導の実質を実習機関側の指導者に委ねているという現状を変えることは難しいと考える。このような状況の中でも教員が有効に実習指導に関わることが出来るように実習指導者とともに教員の指導体制について検討していく必要があると考える。宮崎らは、「今後、実習指導に対する大学側の主体性をどのように発揮するかについて、より明確にすることが重要である。そのためには、実習施設において教員が学生に関わることが有効な場面を明確にする必要がある。」と述べている（宮崎，2006）。今後は、現在行っている教員による実習地のラウンドの際に、教員は教育や学生理解のための指導者への関わりを強化していくこと、また、教員が学生に関わることが有効な場面について、実習指導者とともに検討することが必要と考えられる。

3. 指導者自身に求めるもの

「指導者による事前学習の把握」、 「評価の難しさ」、 「学生指導体制の整備」、 「実習地による実習内容の差」、 「実習受け入れ体制の整備」、 「学ぶ場の減少」、 「保健師の力量形成」、 「住民と関わる機会の減少」という指導者に関する8つのカテゴリーから、指導者自身に求めるものとして、1) 実習受け入れ体制の整備、2) 学生指導体制の整備、3) 教育カリキュラムの認識、4) 事前学習の把握、5) 保健師の力量形成の5項目があげられる。

「評価の難しさ」については、本学では実習評価は、教員と学生の自己評価で行い、指導者による評価は行っていないため削除した。

現況としては、実習機関は合併の影響や保健師業務の高度化・複雑化・多様化に伴う業務量の増加、保健師の分散配置などにより、実習生の受け入れが困難になってきていることがあげられる。

実習の受け入れと指導体制については、市町村保健師から、学生実習そのものを市町村の大切な業務として位置づけるよう県の指導が必要であるという意見があった。これについては、平成16年度の保健師学生の実習指導に関するあり方調査研究事業報告書の中で、調査を行った8割以上の実習機関において実習に関する規定や事務分掌がなく、指導マニュアル等の整備状況も不十分な実態があること、また、実習指導者については、約70%が実習指導に関する研修が受けられていないことが報告されている（平澤，2005）。このような実態をうけて、「地域で円滑な実習の受け入れを行い、学生実習の質を担保するためには、地域側の受け入れ体制を整備する必要がある。実習の受け入れについては、現場の保健師が受けるということではなく、行政組織としての受け入れを明確にする必要がある。実習規定を作成し、事務分掌を明確にすることにより、実習の受け入れがスムーズになり、実習指導者の研修受講等を促進することができると考える。」と述べられている（平澤，2005）。S県においても学生実習の業務への位置づけ、実習指導に関する研修の開催、実習機関における実習指導手引きの作成が早急な課題であると考えられる。

教育カリキュラムの認識と事前学習の把握については、本学は実習前の教員と指導者による連絡会議により、行えていると考えるが、今後とも十分な説明を行い、指導者の理解をはかりたい。

保健師の力量形成については、保健所、市町村保健師ともに学生の新鮮な気づきによって考えさせられたり、良い刺激になること、学生指導をすることで自分自身の勉強にもなるという意見があった。実習を受けることが保健師自身の力量形成につながることは、本学が求めるこ

とでもあり、そのような前向きな姿勢は、学生の学びにもなると考えられる。

4. 指導者が教育体制に求めるもの

「教育機関による指導の差」、「講義と実習期間のズレ」、「実習内容の検討」、実習内容や到達目標について「教育機関・教員による相違」、「実習期間の影響」、「教育機関と実習機関の連携」、「教育内容の充実」、「実習内容の見直し」、「フィールド実習の必要性」という教育体制に関する9つのカテゴリから、指導者が教育体制に求めるものとして、1) 教育内容の充実、2) 実習内容の検討、3) 教育機関と実習機関の連携の3項目があげられる。

「フィールド実習の必要性」については、本学は既に行っているため、教育体制に求めるものから削除した。

教育体制の現況として、S県において保健師教育として保健所・市町村で実習を行っている教育機関は、統合カリキュラムを実施している4年制大学1大学と1年課程の本学の2大学があることがあげられる。

「教育機関による指導の差」や実習内容や到達目標について「教育機関や教員による相違」については、4年制大学と本学では、違いがあるのは当然であると考えられる。実習内容については、看護師免許がある本学学生と看護師免許がない4年制大学の学生では、実習において出来ることが違ってくる。本学は見学実習ではなく、実践を伴った実習を望んでいる。今後の本学における実習内容の充実については、行政機関だけでなく、保健福祉活動に関係する他機関での実習を取り入れるなど、幅を広げた実習のあり方を検討することも必要であると考えられる。

教育内容の充実については、1年課程の本学においても更なる充実をはかる必要性はあるが、統合カリキュラムを実施している4年制大学における教育内容の充実には限界があると考えられる。本研究調査では、すべての項目において、学生の「将来像の明確さ」による差があり、4年制大学と専攻科の学生の差が明らかであった。専攻科の学生は、看護師資格を持っており、将来保健師になるという目的も明確に持っている学生が多いため、実習に対して積極的に臨んでいた。

保健師と看護師を統合した教育カリキュラムを実施する看護系大学が増加している状況において、宇座らは、「新卒保健師の職場不適応や住民に対峙するだけの能力が育っていないために対人支援の実践を敬遠する傾向を考えると、早急に保健師教育のあり方を検討する必要があると考える。保健師の実務経験のある教員による大学院での教育が望まれる。大学での教育を基礎として、学部から大学院へと一貫した教育体制が整備されることで、保健師および看護師の質の向上をめざした教育の実現につながると考える。」と述べている(宇座, 2007)。

保健師の大学院教育は、すでに平成18年4月から東京大学大学院「保健師コース」で始まっている。村嶋は、保健師コースを開設した狙いとして、保健師の質の担保をあげている。村嶋は、「看護系大学や学部において統合カリキュラムによる幅広い教育がなされること自体には、問題はありません。しかし、その内容は、看護師を選択する学生においては望ましいものであっても、それがそのまま保健師の免許を与えるための教育になりうるかという点、甚だ疑問です。」と述べている(村嶋, 2006)。また、村嶋は現在の看護系大学および学部の教育で、保健師を養成するために不足しているものとして、実習をあげている。統合カリキュラムにおいて、地域看護実習は事業見学に留っており、そのことに関して、「それでは、保健師としての技術は身につかない。保健師としてのアイデンティティが育たなければ、誇りをもって仕事のできる保健師が育たない。今のような学士課程の卒業要件として保健師免許を位置づけていることの弊害は計り知れないと思う。」と述べている(村嶋, 2007)。

以上より、教育内容の充実のためには、保健師基礎教育課程のあり方そのものについても今後、現場の意見も聞きながら検討していく必要があると考えられる。

VI. 結 論

本研究で明らかになった課題は以下のとおりである。

1. 学生としては、1)日頃からの対人関係づ

くり、目的・問題意識を持つ習慣、社会情勢に関心をもつこと、2)生活力を身につけること、3)何事にも積極的にとりかかると、実習に関しては、実習指導者・住民との積極的な関わりを意識して行うこと、4)講義で習っている内容を実習前に学生各自で再学習することが課題である。2. 教員としては、1)実習ラウンド時の指導内容強化、2)現場学習が課題である。3. 指導者としては、1)学生実習の業務への位置づけ、2)実習指導手引きの作成、3)学生指導からの学びが課題である。4. 教育体制については、1)1年以上の保健師教育の必要性、2)実習内容の充実、3)実習指導に関する研修の開催が課題である。

研究にご協力いただきました保健所・市町村保健師の皆様へ感謝いたします。

文 献

- 木村久美子, 齋藤茂子, 天野和子, 伊藤智子, 塩飽邦憲, 山根洋右 (1997) : 島根県における保健婦教育の歴史と課題—社会ニーズに対応した教育方法の展開—, 日本公衆衛生雑誌, 44 (10), 418.
- 清水多實子 (2006) : 保健師養成に求められる教育, インターナショナルナーシングレビュー, 29 (5), 37-40.
- 平澤敏子 (2005) : 平成16年度地域保健総合推進事業 保健師学生の実習指導に関するあり方調査研究事業報告書.
- 大場エミ (2007) : 全国保健師長会から保健師養成に対する期待と新任保健師の教育研修, 保健師の基礎教育に関するシンポジウム「保健師教育の質保証」, 19.
- 宮崎美砂子, 海法澄子, 川又協子, 奥山則子, 平山朝子, 柴田則子, 浅野純子, 荒賀直子, 佐伯和子, 村田昌子, 平澤敏子 (2006) : 保健師学生に対する臨地実習指導の現状調査と大学・実習施設の協働に向けた課題, 保健師ジャーナル, 62 (5), 394-403.
- 宇座美代子, 佐伯和子 (2007) : 保健師の教育, 保健の科学, 49 (42), 243-246.
- 村嶋幸代 (2006) : 保健師免許の質の担保と存

続をめざして、公衆衛生情報, 36 (8), 26-30.

村嶋幸代 (2007) : 修士課程のトレーニングで、保健師としての能力はどのように伸びるか、保健の科学, 49 (4), 259-264.

小田美紀子・齋藤 茂子・小川 智子・永江 尚美

Ideal Way of Community Health Nurse Basic Education that Community Health Nursing Practice Leader Needs

Mikiko ODA, Shigeko SAITO, Tomoko OGAWA* and Naomi NAGAE**

Key Words and Phrases: community health nurse basic education, community health nursing practice, practice leader

*Shimane University, Graduate School of Education

** Health Promotion Division, Department of Health and Welfare, Shimane Prefectural Government